

# 食事を想定したリーチ動作

第一岡本病院 リハビリテーション科

三浦雄一郎、長崎 進、福島秀晃

食事動作はヒトが生きていく上で大切な動作の一つである。また、食事は作法や礼儀にも関連しており、単純に「食す」だけでなく、その食べる様子にも配慮しなければならない。広範囲腱板断裂の高齢女性で患側上肢の拳上が困難であったケースでは自宅での食事動作は体幹を前屈させ、口を御椀に近づけ、更に肘をつくことで可能であった。しかし、孫の結婚式ではそのような作法で食事するわけにいかず、参加するか否か迷い、これがリハビリテーションに対するモチベーションとなることがあった。このように食事動作は単に「食す」だけでないため、リハビリテーションでは「食事動作」の運動機能について深く知る必要がある。食文化が広がる中、日本人も海外の食生活に影響されるが、基本的には座位、立位を保持することが前提になる。そこから上肢を動かして食事をすることになる。そこに関連する関節運動は肩関節、肘関節、前腕、手関節、手指が主要である。それぞれの関節が相互に与える運動連鎖は評価・治療するうえで大切な知識となる。特に前腕・肘関節・肩関節の関係性は重要である。異常動作として表出する動作は一般的に代償運動であることが多く、仮にそれが肩関節に生じていた場合、リハビリテーションの主たる問題は肩関節となり、アプローチも肩関節になる。しかし、「前腕・肘関節・肩関節の関係性」を知ったうえで評価することで、違ったアプローチも可能になる。

また、食事動作では目的となる「食物」を箸、フォーク、手などで取りに行く動作でもある。これは「リーチ動作」と言われている。「リーチ動作」には上肢の長さを上限とする範囲と上肢の長さを超えた範囲で分けることができる。一般的に食事動作は前者が多いが、食文化で考えると「乾杯」などでは後者の場合もありうる。そのため「リーチ動作」では上肢の長さを上限とする範囲と上肢の長さを超えた範囲を想定する必要がある。上肢の長さを上限とする範囲では前述した「前腕・肘関節・肩関節の関係性」が中心であり、上肢の長さを超えた範囲でのリーチ動作では「体幹と肩甲帯との関係性」が特に重要であると考えられる。本講義では「前腕・肘関節・肩関節の関係性」と「体幹と肩甲帯との関係性」について紹介する。

このように「食事動作」は中枢から末梢まで関連するので動作観察でも様々な部位を多面的にとらえることが大切になります。近年、安価で操作性に優れた三次元動作解析が可能な「キネクト」についてもデモンストレーションしようと考えています。